

拈華付法についての一考察

星 俊 道

平成三年に発表した「道元禅師の嗣法観」で私は、道元禅師が嗣法の時機をどのようにとらえておられたかということについて論考し、禅師は「面授嗣法」を、ある一瞬に限定された特別なイベントではなく、「仏行」の不断の連続であるとされ、初相見時に始まる連続したタイム・スケールを有したものである、ととらえておられたのではないかという結論を得た。

その後、「正法眼蔵と仮想現実」・「道元禅師における宗教的時間の特質」を経て、禅師にとって個々のイベントは、刹那を単位とした同一ベクトルとして示され、従って特別な意義や価値を有するというのも無く、全ては「仏行（妙修）」の不断の連続の中の一事象にすぎない、ということについての確信を強めた。

特に、『正法眼蔵』や『永平広録』における記述は、歴史的事実がそのまま記されたのではなく、禅師によって再解釈されたものであるという点には留意しなければならない。

印度學佛教學研究第四十四卷第一号 平成七年十二月

道元、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古仏を礼拝面授す。やや堂奥を聴許せらる。わづかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本国に本来せり⁽¹⁾。

実際には、時間の経過に従って、初相見があり、身心脱落（どのように定義するかは難しい問題であるが）があり、嗣法があったはずなのであるが、禅師の思想という観点から見た場合、それぞれのイベントが持つ特別な意味は消え、全ては等価と看做され、更に一瞬で終了してしまうのではなく、連続した存在として位置づけられるのである。

ところが、最近の傾向として、「身心脱落」に一瞬のイベントとして特別な意義を見出そうとする論調が増えてきたように感じる。

一例を挙げると、駒澤短期大学講師の角田泰隆氏は、道元禅師の身心脱落とは「参禅は身心脱落なり」という信決定であり心決定であると確信している。つまり、「坐禅こそ身心脱落である」ということが、全身心を挙げて（身心）徹底的にわかっ

た(脱落)ということが「身心脱落」であると信ずる。⁽²⁾
と述べておられる。

しかしながら、この解釈には確かに苦心の跡はしのばれるが、いわゆる宗師家の提唱としてならともかく、研究者としては、論理的にトートロジーに陥ってしまったている点からみても、かなり無理があると言わざるを得ない。今回はこれ以上触れないが、改めて別の機会に問題提起する必要性を痛感している。

ところで、前回の論文中で、

「面授の現成」は初相見時でも、拈華微笑時(釈尊と迦葉の場合)でも、あるいはその他の何時いかなる時点を抜き出してきて、一向に構わなかったのであろう。⁽³⁾

と述べたのであるが、実際には禪師が「多子塔前付法説」とられたのは『宝慶記』のみであり、『正法眼蔵』および『永平広録』においては、全て「靈山付法説」とられるのである。もし、前記の仮定が正しいのであれば、ランダムに現れてもよいのではないかと思われるのであるが、何故そうなのではないのだろうか。

この点について榊林皓堂博士は、「拈華付法と鑿山伝光録——道元禪師のそれとの対批において——」中で、

これは軽々に断定を下すべきことではないが、それはおそらく高祖が面授の仏法を強調するからであらう。『面授』の巻において

も道元高祖はその巻頭において『優曇華』の巻と同様に、「靈山會上、百万衆中、拈優曇華瞬目」云々と、付法の全文をまず出したのち、その面授相承(仏法相承)が一朝一夕に成就するものでなく、粉骨碎身の努力を要するとし

迦葉尊者したしく世尊の面授を面授せり、心授せり、身授せり、眼授せり、釈迦牟尼仏を供養恭敬、礼拝奉觀したてまつれり、その粉骨碎身いく千万遍といふことをしらず、自己の面目は面目にあらず、如来の面目を面授せり……

といふ、幾千万遍の粉骨碎身、自我克服がなければ、「釈尊いきうつし」の我にはなれぬとしている。面授は「まのあたり授ける」というのであるから、与える師の側から云うのであるが、これを受取る弟子の側からすれば面授となる。それゆえ面授面授と云われるが、永き年月に亘り師に親しく接し、親しく導かれることを主眼とする。この面授の仏法——いく千万遍の苦闘の結果としての得道という側からすれば、迦葉付法の時期は、道元高祖としては初相見の一刹那よりは、その後永き修練の結実としての得法ということにならざるを得ないのではなからうか。結論的に云えば面授の仏法を強調する道元高祖としては、必然的に靈山付法説とならざるを得ないのではなからうか。⁽⁴⁾

と述べておられるが、二つの点で、問題があると思われる。

まず、「永き年月に亘り師に親しく接し、親しく導かれることを主眼とする」というのは、まさにそのとおりであるが、そうであれば、既に述べてきた禪師の思想からいって、

「いく千万遍の苦闘」のプロセスの一瞬一瞬こそが面授であり、得道となるはずである。「結果としての得道」という面に重きをおくことには疑問を呈せざるを得ない。

また、同様に、「初相見の 一刹那」と「その後の永き修練の結実としての得法」は等価と看做されることは『正法眼蔵』出家巻等の記述からもあきらかである。それ故、「結果としての得道・得法」を強調するという点から禅師が「靈山付法説」をとられたという説は賛同しかねるのである。

では、一体、他にどのような理由が考えられるのであろうか。私は、逆ではないかと考える。つまり、禅師が「結果」を強調されたのではなく、それ以前の人々によって一般的に重要視されていた「得道」としての「靈山付法」を、軽視されていた「初相見」と取替えて対等・並列に扱うことにより、既成概念の打破をねらわれたのではないかと思うのである。丁度、『正法眼蔵』発菩提心巻で、「初発心」と「成無上菩提」が、劫火と螢火程異なっているのも同一であると説かれたのと同様のレトリックだと考える次第である。

今回は仮説の提示のみにとどまり論証までには至らなかつたが、今後の課題ということで御容赦頂きたいと思う。

1 『正法眼蔵』面授巻 大久保道舟編『道元禪師全集』（以下『全集』と略記）上巻 四五〇頁。

拈華付法についての一考察（星）

2 角田泰隆「道元禪師の身心脱落について」『駒澤短期大学研究紀要』第二十三号 一二二頁。

3 拙稿「道元禪師の嗣法観」『印度学仏教学研究』第四十巻第一号 二六八頁。

4 樽林皓堂「拈華付法と靈山伝光録——道元禪師のそれとの対批において——」『宗学研究』第二号 一〇頁。

5 おほよそ無上菩提は、出家受戒のとき満足するなり、出家の日にあらざれば成満せず。しかあればすなはち、出家之日を拈来して、成無上菩提の日を現成せり。『正法眼蔵』出家巻『全集』上巻 五九八頁。

6 阿耨多羅三藐三菩提と初発菩提心と格量せば、劫火・螢火のごとくなるべしといへども、自未得度先度他のところをおこせば、二無別なり。『正法眼蔵』発菩提心巻『全集』上巻 一六四六頁。

〈キーワード〉 嗣法、面授、身心脱落

（曹洞宗宗学研究所員）